

『ココロ・コート』

間詰ちひろ

9995文字

あらすじ

真希が朝起きるとバイトの連絡が入っていた。そのバイトはとある条件をかかえた掃除の手伝いをして欲しいというもの。父を亡くし、悲しい気持ちを抱えていた真希は、そのバイトの手伝いすることに決めたのだった。

「真希ちゃん、暇？ バイトしない？」

眠ってしまって、気付かなかったけれど太田さんから、夜遅くにメールが届いていた。

枕元に置いてあるスマホをチェックすると、受信を知らせる通知のマークがあった。起きたばかりで、ボンヤリと働かない頭を動かし、どうしようかと私は思案した。

太田さんはイベント会社の社長だ。バイト情報誌に出ていた「短期！ 1日からでもOK！ イベントバイト大募集！」という文言をみて応募したことから知り合った。40代前半で以前は広告代理店に務めていたけれど、一念発起して会社を立ち上げたのだという。

依頼される仕事の内容は様々だった。駅ビルの抽選会や、ショッピングモールのスタンプラリーなど、小さなお子様とお母さんがきてお菓子が当たれば大喜びするようなホンワカとしたイベントが多かった。けれど時々、来場者の目付きを見ると純粹に展示を見に来ているか怪しくて、「ちょっと目的が違うんじゃないか？ と疑わずにはられない展示会のコンパニオンの仕事を受けたこともあった。

太田さんからのバイトの誘いは、いつも決まっていた。

「真希ちゃん、10日、暇？」などと、メールがくる。はじめからどんな内容のバイトで、集合場所がどこかを教えてくれない。しつこく聞けば教えてくれるらしいのだけれど、私は面倒くさくて、あまり聞くこともなく「行けます」とか「午前中なら」など最低限のやり取りだけを返信していた。

久しぶりのバイトの誘いに、私は少し迷っていた。けれど前回のバイトをキャンセルしてしまったことにもすこし申し訳なく思っていたので「暇です。やります」と返事のかえした。

昼過ぎに、太田さんからメールの返信が届いた。

「ありがとう！ 助かります。詳細を伝えたいんだけど、一回会える？」

……珍しいな。

普段、こんなこと言ってこないのに。何か条件があるバイトなのだろうか……？ それとも、私を気遣っているのだろうか……？

「いつでも大丈夫です」

変に勘ぐるのはやめておこう。たかだかバイトなんだし。少しだけ引かかるものがあったけれど、気にしても、仕方がない。

太田さんからの返信は、すぐに届いた。

「じゃあ、明日で良いかな？ 時間は真希ちゃんにあわせませう」と書かれていた。一緒に飲みに行くような間柄でもないし、一緒に飲もうと言われるのも面倒だなどと思い、当たり障りない時間にしようと思い「じゃあ14時に事務所に伺います」と返信した。そうして、スマホの画面を伏せて、少しだけ遠くに置いた。

短期バイトをしていた理由は、とても単純だった。長期のバイトに入れなかったからだ。この日だけ、この一週間だけと決めて動くことしか私にはできなかった。

それは、父と一緒に暮らしていたからだ。父はすこし身体が不自由だった。自分のことが何にもできない、というわけではない。一年前に脳梗塞になり、救急車で病院に運ばれた。偶然にも、趣味の合う自治会の人たちと集まっていたときに様子がおかしくなり、周

りの人が父の異常にすぐに気付いてくれた。そのため、処置も早く一命を取り留めたのだけれど、すこしだけ、身体には病気の足跡が残ってしまった。

病気になる前までは、父はひとりで身の回りのことを、こなしていた。けれど、身体の右半身に麻痺の症状が出てしまったことで、かなり深く落ち込んでしまった。それまで、当たり前前にできていたことが、できなくなっている。完璧主義だった父は、その現実を受け止めきれないようだった。

父は弱音を吐くことはなかった。けれど、仏壇の前に座り、母の遺影をじっと見つめている後ろ姿からは「早くお前の側にいきたい」という父の心の声が漏れているように感じられた。目には見えないほど、心の中にうっすらと入ったヒビから、ポタリと、漏れてしまったのだろう。

そんな父の姿を見てしまった以上、私はいてもたってもいられなくなった。大学時代から一人暮らししていたアパートを引き払い、実家に戻って父と暮らすことにした。仕事まで、辞めてしまうことはないだろうと、父は慌てていたけれど「どうせ派遣社員だし、契約を更新しないだけ」と言い張った。できるだけ父のそばにいてやるんだと、今思い返してみれば、かなり意地になっていたのだろう。

そうして私は父との二人暮らしを始めたのだった。

父と一緒に暮らしてみると、私が思っていた以上にできないことが多かった。右利きだったのに、右手に麻痺の症状が出てしまったのだから、あたりまえだ。

もっと早くに気づいてあげられればよかったと、私は何にも気づかないでいたバカな自分を責めた。けれど、今一緒に暮らしているのだし、今できることをするしかないとの舵を大きく切ったのだった。

そうはいっても、四六時中父のそばに付きっきりでいる訳にもいかない。母の生命保険のお金と、父の退職金があるとはいえ。父の介護もどきをしているからといって、働かなくてもいいわけじゃない。

それに、父との二人暮らしは思いのほか息が詰まる場所もあった。もともと生真面目で、何事もピシッとしていなければいけない父と、だらしなく、ピシッとしてられない娘という組合せは、思ったよりも疲れることが多かった。

暮らし始めたばかりの頃はどちらかが何かをガマンしなくちゃいけない、ということばかり。大抵は私が我慢するようにしていたけれど、しんどいなと感じることもあった。だけど、父と暮らすと決めたのは私自身なのだ。多少イラつくことには目をつぶろうと心に決めた。

父の生活リズムをつかむまで、週に五日フルタイムで働くのは難しいと感じられた。何か良さそうなものはないかと駅でもらったバイト情報誌をペラペラとめくっていたときに「短期！ 1日からでもOK！ イベントバイト大大大募集中！」という文字が目にとまり、これだと思って応募した。

そうして、私は呼び出されたときにはパッと行ってパッと稼いでくる短期バイトを始めた。

私が家にいない時、父に不自由がないように、片手でも簡単に食べられるおにぎりだとか、すぐに飲めるように、ポットにお茶をつくったりしてバイトに行った。父はいつも「そんなに気を使わなくても、自分でもできるよ」と、申し訳なさそうだった。その申し訳なさそうな父

の姿を見るのが嫌で「お茶、水筒に入れてバイトに持っていったら。お父さんののは、ついでだから」とわざとそっけなく言うと、そうか、と笑って頷いてくれていた。

その笑顔の主は、もう、側にいない。

翌日、太田さんとの約束の時間が近づき、出かける支度を始めた。出かける支度をする、いつもお茶を沸かさなきゃ、という気持ちになった。もう、水筒を持っていく必要なんてないのに。なんとなく波だってしまった心はどうにか落ち着かせた。

玄関を出る時に、「行ってきます」と空っぽの部屋の中に声をかけて、静かにドアの鍵をかけた。

太田さんの事務所に向かっている途中、ブルブルとスマホが震えた。バッグから取り出して確認すると、太田さんからメールが来ていた。「駅前にあるドルフィンっていう喫茶店に来てください」と書かれていたので、私は「承知しました」と返信した。

喫茶店に入ると、太田さんはすでに来ていた。イヤホンをしながら、ノートパソコンを開いている。何やら集中して仕事をしているようだった。少し、声をかけにくい雰囲気だった。けれど、私だってバイトの用事で呼ばれてるんだと思い直して、太田さんの座っているテーブルに近づき「ご無沙汰しています」と挨拶した。

太田さんは、ノートパソコンの画面から顔を上げて、イヤホンを外した。

「ああ、真希ちゃん。お久しぶりです」

太田さんは、そう言って、私に腰掛けるように手で指図した。そして、一旦呼吸を整えたのち、真面目な顔をして、私にこう告げた。

「この度は、ご愁傷様でした。……もう、いろいろ落ち着いた？」

私は、なんと返答するのがいいか迷ってしまい、曖昧にうなずいた。

「……あの時はすみませんでした。サマーセールイベントで忙しい時期に、急にバイトを休んでしまって」

私がそう言うと、太田さんは静かに顔を振り、「それは、気にしなくていいから。全然」と言ってくれた。そのタイミングでお店の人がお水を運んできてくれた。そのおかげで、それ以上会話は続かず、思いがけない太田さんの優しい言葉にこぼれそうになった涙を堪えることができた。

「バイトが始まる前にちゃんと説明してくれるのって、珍しいですよ」

動揺してしまったことを気づかれまいと、私はムリに明るい声を出した。太田さんは私が無理をしていることなんてお見通しで、少し困った顔をしていた。

「このバイト、真希ちゃんに頼んで良いのかどうか、正直迷っているんだ。だから、一回話を聞いてもらおうと思って」

太田さんは目の前に置かれたアイスコーヒーのストローを、ぐるりとかき混ぜた。そのしぐさは太田さん自身の心に沈んでしまっていた気持ちをかき混ぜて、勇気を振り絞るかのように見えた。

「もし、嫌な気がしたら、断ってくれて構わないから」

「はい」私はそう言って、小さくうなずいた。

「今回お願いしたいバイトはさ、イベントじゃないんだよ」

私の前にカフェラテが運ばれてきて、ひとくち飲んだ後に、太田さんはこう切り出した。
「体育館の掃除を手伝ってほしんだ」

「はあ……」

一瞬、何を言われたのか、私は理解できなかった。体育館の掃除のバイト？ と不思議
そうな私の表情がおかしかったのだろう。太田さんはプツと吹き出した。

「いや、ごめん。掃除のバイトって、何だよ？ って思うよね」

「はい。なんか、わざわざ事前に打ち合わせなきゃいけない事情があるんですか？」

私は、少しだけ陰い表情で太田さんに質問した。私に声をかけた事情が、何かあるの
だろうか？ それとも、誰でも良いから暇そうな人に片っ端から声をかけているのかな
……？

「実は、この仕事、俺にとってはボランティアというか。お金には全然ならないんだよ。た
だ、一人ではちょっと目が届かなくて心配だ、というのが真希ちゃんに声をかけた理由の
ひとつ」

そう言って太田さんはアイスコーヒーのグラスを手にとって、ゴクリと飲んだ。これから発す
る言葉を言い間違えないように、決意をこめたようにも見えた。

「もう一つ、理由がある。もともと、この体育館の掃除の仕事を請け負っているのは俺の近
所に住んでるじいちゃんなんだ。昔っから世話になってて。武内さんって言うんだけど
……」

たかだか掃除なのに、なんか深刻かな？ 私はちょっとだけ、面倒なことに巻き込まれて
しまうんじゃないかと、少しだけ不安の芽がニョッキリと顔を出していた。

「武内さんは、昔から小学校の備品とか、掃除道具とか、こまごましたものを販売したり、修
理していた。用務員さんみたいな感じかな？」

私はこくりと頷いて、話をうながした。

「で、その武内さんが、病気になってしまって。それが……」

「脳梗塞、なんですか？」

私は思わず、太田さんが発するかもしれない言葉を先に声に出していた。

太田さんは、私の顔をじっと見ながら、少しだけ悲しそうな表情を見せて、小さく首を縦
に振った。

「真希ちゃんさ、お父さんを病気で亡くしたばかりだし、辛いかなと思うんだけど……」

太田さんはそこで、言い淀んでしまった。

「とりあえず、お話を伺います」と、私は小さな声で答えた。

太田さんは、少し息を吐き出したのち、意を決したかのように話を続けた。

「武内さん、元気は元気なんだ。でも、すこし体に麻痺が残ってしまったんだよね。それで、
思うように動けなくなった。でも、車椅子に乗らなきゃいけない訳じゃない」

「はい。うちの父も、そうでした」

「うん。でね、武内さん『俺の目の黒いうちは頼まれた仕事は断りたくない』って言っててさ。
体育館の掃除も引き受けちゃったんだよ。……自分ではできやしないのに」

そこまで言って、太田さんは悲しそうに目を伏せた。武内さんというおじいさんのことを思
い出しているのだろう。私は、気になっていることを質問した。

「あの、何で私にバイトしないか？ って声をかけたんですか？ 掃除のバイトなら、誰でも良いですよ？」

すると、太田さんは「はは……」と情けなく笑って、こう続けた。

「俺も、初めはそう思ってたんだ。だけどさ、このバイトで一番必要な任務は掃除じゃないんだよ。一番大事な任務って何だと思う？」

太田さんは私に質問してきたけれど、私は何も言葉を発することはできず、黙っていた。「一番大事なのはさ、武内さんのサポートをすることなんだよね」

太田さんはそう言って、小さなため息をついた。

「武内さん自身は、自分はまだまだやれる！ って思ってるんだけど、身体は思うように動かせなくて。一度、大学生の男の子に手伝ってもらったんだけどね。武内さんのこと全然見てなくて、転ばせてしまって……。大事には、ならなかったんだけど」

太田さんは、自分を責めているようだった。自分の立てた目測を誤って、武内さんにケガをさせてしまったことを後悔しているのだろう。

「それで、私に白羽の矢が立ったんですね」

私は、ようやく、なぜ自分が掃除のバイトに呼ばれたのかを理解できた。父のサポートをしていた私なら、武内さんというおじいさんの動きが分かるんじゃないか、ということだろう。

「真希ちゃんが嫌じゃなければ、どうかな？ 掃除一件につき、一万円でどう？」

私は、ちょっとだけ悩んだ。そうして、こう言った。

「ひとつだけ、お願いがあるんですけど」

「なに？」

太田さんの声は、とても優しくかった。

「もしも、私が掃除の途中で、父を思い出して泣いていても、ほっといてくれますか？」

真剣な眼差しで、私が言った言葉に、太田さんはハッとした顔をした。けれど、すぐにうん、と頷いて「それは、約束します。必ず」と言ってくれた。

体育館の掃除は、太田さんと喫茶店で話をした、一週間後から始まった。

喫茶店「ドルフィン」の前で待ち合わせをして、時間が来れば軽のワゴンで迎えに来てくれる。運転席には太田さん。助手席には武内さんが座っていた。軽自動車の窓を開けて、太田さんが「お待たせ。今日はよろしくね。あ、このおじいさんが、武内さんね」と、明るい口調で私に話しかけてくれた。

「はじめまして！ 山口真希、と言います。よろしくお願ひします」

私は心を落ち着かせ、声が震えないように気をつけて挨拶をした。

「ああ、はい。よろしくね」

武内さんの声は、少しだけ聞き取りにくかったけれど、気にならないほどだった。

「うしろ、荷物いっぱいだけど何とか乗ってください」

太田さんが、後部座席を指差しながら、私に指示した。後部座席から運転席までを横断する長いモップが何本もあった。バケツや、雑巾、小さなダンボール箱なんかが所狭しと積み上げられていた。

「こんなベっぴんさんが手伝ってくれるんなら、もっと片付けとけばよかったなあ」

武内さんは小学校までの道のりで、恥ずかしそうに何度も「車が汚丸て申し訳ない」と私に謝ってくれた。本当は車がカーブを曲がるたびに、モップが雪崩れてきそうでちょっとビクついてはいたけれど、「全然気にならないですよ」と、武内さんを安心させたかった。

小学校に到着して、武内さんを車から降りる手伝いをした時、私は少し泣きそうになった。少しでも外見が父と似ていたら、私は泣き出してしまっていたに違いない。けれど、武内さんは私の父よりも随分と年上だった。ギョロリとして、厳しい目つきや、なんだか縁起が良さそうと思わずにはいられないタツプリとした福耳。それに引き換え、寂しくなっている頭髪。何ひとつ父とは似ていなかった。けれど、半身をかばうように引きずる足や、身体を傾ける仕草が、父と似ていたからだ。

気を抜くと涙が溢れてきそうだったけれど、ありがたいことに気を抜く暇がなかった。武内さんは「職員室に挨拶しに行くから」と、勝手にドンドン歩いていこうとする。太田さんは体育館の側に掃除道具の準備を始めるからと、それぞれ役割が決まっていた。

私は少し慌ててしまった。えっと、どうすればいいんだろう？

どちらの手伝いをすべきかわからず、ウロウロと迷っていたら、太田さんが大きな声で私に言った。

「掃除道具はとりあえず俺が運べるから、武内さんについて行って！ じいさん、足、上がんないから！ 転んだら、面倒だから！」

太田さんはわざと声が聞こえるように叫んだらしく、武内さんは、ガハハと声をあげて笑っていた。

小学校の中に入るためには、外で履いていた靴を脱がなければいけないので、私は「せーので、靴を脱がせますよ！ せーの！」と、父にしていたことと同じように、武内さんに声をかけた。武内さんは「あー、やれやれ。ありがとね」と、思うように動かさない自身の足をゴシゴシとさすった後、また、前傾姿勢で歩き出した。

「失礼しますう」

武内さんが職員室の扉をノックして引き戸を開けようとした。力が思うように入らないようで、うまく開けられずにいたので、私が開けてあげた。

体育館の鍵を借りて、来た道を同じように戻り、体育館の前に着いた。

「鍵、持ってきた？」

すっかり準備を済ませていた太田さんは、私と武内さんの到着を待ちわびていたようだった。

「はい、これです」私は鍵を太田さんに渡した。太田さんは「さてと、じゃあ、始めますか」と独り言のようにつぶやいて、体育館の鍵を開けた後、武内さんを見ながら、こう言った。

「武内さんは、ここで、チェックしといてくださいよ」

武内さんは渋々、といった表情で頷きながら「足手まといになるからな」と投げやりな口調で言った。私はすこし、武内さんの弁護をするべきか、とも思ったけれど、どうやらいつものやり取りのようだった。太田さんも武内さんも楽しそうにホッとした。武内さんは体育館の入り口の扉にもたれて座ってもらうようにした。

「じゃあ、真希ちゃん。掃除のやり方教えます」

太田さんは手招きして私を呼んだ。私は慌てて靴を脱いで体育館に入った。教える、というほどのこともなく、手順は単純だった。掃除、と言っではいるけれど、ワックスがけをするのが目的なのだという。まず、体育館の埃をキレイにする必要がある。一メートルくらいの幅があるシート状のモップを使って、端から端まで歩き回る。体育館の舞台の部分もワックスをかけるので、そこの掃除も怠らないようにと言われながら、壁から壁へと何度も往復した。埃を取り去った後に、床を専用液で水拭きする。水拭きが乾いた後に体育館専用のワックス液を使用してワックスがけをおこなうのだ。適当にワックスがけをすると、体育館から出るときにせっかくキレイに塗ったワックスを踏んでしまうことになるので、順番を決めて、丁寧に行わなきゃいけない。

「私が小学生のころは、自分達でワックスがけしましたけど。今は小学生達が掃除しないんですね」

太田さんに聞いてみたところ「教室はそれぞれ、生徒がやってるみたいなんだけどね。体育館は専用ワックスじゃなきゃダメだし、時間もかかる。それで、なぜか武内さんの仕事なんだ」と笑っていた。

隅から隅までワックスがけを終えると、思ったよりもずっとした疲労感があった。それと同時に、ピカピカになった体育館を見ると、達成感もあった。

「武内さん、終わりました」

太田さんが、座って待っていてくれた武内さんに声をかけた。武内さんは立ち上がろうとしたので、私はとっさに駆け寄って、私の肩に掴まるように促した。武内さんは、ありがとう、と私を見て、麻痺が残り、すこし引きつってしまう笑顔でお礼を言ってくれた。

「おう。キレイなっとる、なっとる。合格！」

武内さんは、ワックスがけの終わった体育館をぐりと見渡したのち、笑いながらそう言った。

「不合格って言われたら、困っちゃうよ」と、太田さんも笑いながら道具を片付け始める。「これ、ザッとでいいから、あっちの水道で洗ってきて。洗い終わったら車の方に運んでくれる？」と、ワックスをかけるときに使用したモップを渡した。太田さんは武内さんに付き添って、職員室に鍵を返しに行くようだった。

モップもきれいに洗い、荷物を車のそばまで運んだ。まだすこしワックスの残っているダンボール箱はずっと重かったけれど、なんとか運び終えることができた。車のそばで待っていたら、太田さんと武内さんがゆっくりと歩いてきた。二人とも、笑いながら話していて和やかな雰囲気にも包まれているのが遠くからでも伝わってきた。

「真希ちゃん、お待たせ！ 今日はお疲れ様でした！」

先に武内さんをゆっくりと助手席に乗せ、シートベルトを締めてから、太田さんと私はそれぞれ車に乗り込んだ。そうして、お疲れ様と労いの言葉をかけられ、武内さんから「これ、今日のバイト代ね！ また、よろしく頼むよ」

と言って、私に茶封筒を渡そうとした。身体をねじりたかったようだけれど、うまくできなかつたらしく腕だけを後ろに伸ばして、私に差し出した。

「ありがとうございます」

私はそう言って、両手で茶封筒を受け取った。そして、封筒の中は見ずに、そっとポケットにしまった。

帰り道、私は掃除中に太田さんと話していて不思議に思ったことを武内さんに聞いてみた。

「体育館の掃除って、どういう経緯で始められたんですか？」

すると、武内さんは、うーん……と、うなりはじめてしまった。ミラー越しに見る武内さんの顔は本当に困っているようだった。「いや、何でだったかなあ？ もうずいぶん前からやってるから、忘れちゃったよ」武内さんは困ったような表情だったけれど、笑っていた。

「だけど、オレがピカピカにした体育館でさ、子供たちが思いっきり駆け回ったり、踊ったりするんだと思うと、やっぱり嬉しいからね。生きがいみたいなもんだよね。仕事の的には、ほとんど赤字だけだよ」そう言う武内さんの表情は晴れ晴れとしていたし、運転席の太田さんも笑っていた。私も、つられて笑ってしまった。

それから私は、週末になると体育館の掃除のバイトに出かけた。数をこなせばこなすほど、三人の中でチームワークのようなものができてきた。

すこし寒い日は武内さんの体が動きにくいこともあるから、なるべく目を話しちゃダメだとか、そう言ったことも分かるようになった。ワックスがけの手順も初めてのときに比べると、ムラなく、きれいに塗れるようになっていった。

床の木目に沿って、塗り忘れることのないように。丁寧に、でも、素早く。

掃除をすればするほど、心のなかにあった悲しみが薄れていくようにも感じられた。

毎日子ども達が駆け回る体育館の床が、こうしてきちんとメンテナンスされることで、長く使い続けられるのと同じように。私の心の悲しみに、すこしずつ「大丈夫だよ」という膜をかぶせてもらっているように思えた。

「真希ちゃん、掃除の腕、あげたな！」と、いつも帰り道に笑顔で言ってくれることが嬉しかった。

「ワックスがけは学校がまとまった休み前の、季節の仕事だからさ。また、夏にお願いするよ。他にも、なんかあったら手伝ってもらうかもしれないけど」

ワックスをかける体育館が一通りおわってしまった最後の日。武内さんはそう言って、私にっこりと笑いかけてくれた。

「はい。ありがとうございました。なんか、ちょっと寂しいですね」

私は、つい、そう言ってしまった。けれど、武内さんはガハハと、すこしゆがめた顔で笑いながら「別に仕事じゃなくても、遊びにくりゃ良いわ！」と言った。

太田さんは「また、バイトの連絡するねー」といって、武内さんを車に乗せて帰っていった。

父を亡くした悲しみは、絶対に消えるわけじゃないし、消そうとも思わない。

けれど、武内さんの存在が私にはとても大きかった。「もしも、父が生きていたら……」と、武内さんの動きをサポートするたびに思わずにはいられなくて、涙が溢れてしまいそうなきもあった。武内さんも太田さんも私が泣いてしまいそうだとすることに気がついて、そっと

してくれていたのもありがたかった。

けれど、同時に武内さんが豪快に笑う、その笑顔にも救われていた。そして、その武内さんを見守る太田さんの優しい顔やしぐさにも救われていたのだろう。

何よりも、父を亡くしてしまった悲しみでしょんぼりと萎んでいた心が、ワックスをかけるようにピカピカに、強くなっていったように感じたのだ。悲しみを消し去るのではなくて、悲しみを覆うように、少しずつ心をコーティングして強くなればいいんだ。そう思えたのだった。

(了)